

## 生活保護申請 => それは墮落の道??

アタマを切り換える過渡期の混乱です。「墮落」とは無関係です。

### 「所得の源は労働」の考えでは、もはや社会が成り立たない

生活保護の活用は過渡期の必然

56歳の人の曰く、「まだ元気やし、働く気もある。

生活保護に行くと、墮落しそうだから、まだ、行きたくない。」

生活保護に行くと、墮落するかどうかは、本人の心がけと、社会の認識、社会生活の設計の問題で、現状の困窮状態を何とかすることのほうが、優先順位としては高いのではないかと思います。

理屈はともかく、本人が得心しなければ、何もありません。それで、自立支援センターを活用する方法もあることを伝えました。

個室ではありませんが、寝泊りでき、三食風呂付、自分で職安がよいなどして求職活動をする事ができます。ただし、利用期間が決まっています。3ヶ月です。その間に、職が決まり、貯金できれば、アパート生活に移るようになります。

その努力をした上で、やはり、定職につくことができれば、再び、野宿・夜間宿所利用の生活に戻ることになります。

その時は、もう少し、長期にわたってじっくり求職活動をするために、生活保護制度を活用するしかないでしょう。

最初から、生活保護を活用したほうがいいとも思いますが、やはり、本人の気持ちが大切。できる努力をして、気持ちに踏ん切りをつけるために、自立支援センター活用という過程を経るといって考え方もあるでしょう。

成功事例(就職・長期定着・生活安定)は、そう多くないようですが、皆無ではないので、挑戦してみるのも選択肢の一つとしては、ありだと思われれます。

ただ、それは個人の気持ちの整理の問題であって、生活保護を受けると墮落するとか、生活保護は社会的に一方的に負担を掛けるものだ、という考え方が正しいと

世間には、いろんな考え方をしている人がいます。

「もはや、労働と収入は切り離して考える時代である」という人たちがいます。「働かざるもの食うべからず」ではなく、「働く人も、働いていない人も、皆

平等に、生活に必要な最低限度の収入は保障されるべきだ」という考え方です。

古山明男さんという人が、「ベーシックインカム・実現を探る会」で行った講演の記録を読むと、こんなことが書いてあります。

◎「働かざるもの食うべからず」というが、2005年国勢調査によれば、働いて収入を得ている人は、パート・アルバイトも含めて全人口の約48%である。働いていない人のほうが多い。

◎あらゆる産業で機械化がすすみ、人の労働をあてにする割合が減った。その結果、収入を得る仕事にありつけない人が増えてきている。

◎物を作る効率がよくなり、製品は沢山できるが、失業者が増え、消費者が減って、物が売れなくなり、安売り合戦となつている。その結果、賃金の引き下げ、首切りが増え、益々ものを買う人が減る。

◎生産性があがって人が不幸な生活を送るようになるのは、本末転倒というべきである。労働と収入を分離し、誰でもが収入を保障される社会にしなければ、今の混乱は解決しない。

今は、過渡期です。生活保護増大は必然です。

生活保護は、無差別平等、困窮の事実に基づいて、誰でも（永住権を持つ外国人を含む）活用することが出来ます。65歳以上でなければ、あるいは病気でなければ受けられない、というのはウソです。

大阪市立更生相談所（市更相）は、阪堺線の東側、公衆便所横のガードを東に抜けて、交差点を渡ったところにある建物です。

医療センター（大阪社会医療センター）は、「ある時払いの催促無し」、借用書で受診できる医療機関です。市更相あるいは西成労働福祉センターで診療依頼券をもらってから行く必要があります。

医療センターは、センターの建物外の東側に入り口があります。

「自助努力援助のための手引き書—生活保護は怖くない」（無料）をまだ受け取っていない人は、声を掛けてください。手引き書を読んだ後は、役所で保護申請、不動産屋へ。

※ 居所（アパート・マンション）を確保できていない人については、生活保護申請後の手続きの期間（通常2週間）、生活保護施設で待機することになりました。生活保護申請後に、一時宿泊提供を受け、各施設職員の助言を参考に、住居を探してください。アパート・マンションの探し方については、各施設の職員が手伝ってくれることになりました。

20歳から50歳代前半くらいまでの人は、自立支援センターを活用する道もあります。寝場所・食事を提供し、就職活動を支援する施設です。利用期間は、3ヶ月、事情により6ヶ月です。入所希望者は、大阪市立更生相談所（市更相）で相談を。